

地域が変わる—— 地域活性化の現場

米原

◎伊吹の天窓実行委員会 ▶ <http://ibukinotenmado.com>

新しい感性が生み出した里おこしイベント「伊吹の天窓」 伊吹の暮らしと自然の魅力を伝え、地域の思いをひとつに



伊吹の天窓のトレードマークとも言える旗。デイサービス施設の高齢者たちが手ぬぐいをういて製作した

米原市で毎年夏に開催される「伊吹の天窓」は、地域の魅力を全国に発信し地域に活力を生み出す成功事例として高く評価されている。音楽やアート、食そして自然を通じて、伊吹の魅力を全身で感じる事ができるこのイベントは、米原市独自の地域おこし協力隊である「水源の里まいばら みらいつくり隊」事業をきっかけに生まれたものだった。

過疎高齢化が進む伊吹北部に 1,300名動員のイベントを

旧伊吹町の北部には、過疎高齢化が急速に進む8つの集落がある。この集落の現状を変えるために誕生した里おこしイベント「伊吹の天窓」が今、全国から注目を浴びている。

伊吹の天窓という名前には、「人々が寄り添って暮らす里を照らす」という思いが込められている。イベントの発起人であり、「水源の里まいばら みらいつくり

隊」として甲津原にやってきた舟橋麻里さんが集落から仰ぐ空の美しさに感銘を受け名づけたものだ。

みらいつくり隊とは、総務省の「地域おこし協力隊」の制度を活用して米原市が募集し、都市部から地域社会の新たな担い手となる人材を受け入れ、地域の維持・強化を図るプログラムだ。「最大の特徴は、隊員が自分たちの思いを持って新たな活動を展開していく点だ。住民が手伝ってほしいことを助けるのではなく、新しい視点で地域を見つめ、火

付け役となって地域に活力を呼び戻すことを目的としている」と米原市政策推進部の川瀬直重さんは語る。伊吹の天窓も、この隊員たちの活動から誕生した。

2011年に初めてイベントを開催し、甲津原地区の行徳寺でコンサートや地元の商品の販売をしたところ、175名の来場者が県内外から訪れ、境内から人が溢れるほどの盛況を博した。12年からは奥伊吹スキー場に会場を移し、毎年規模を拡大して実施。京都・大阪・兵庫など県外からの来場者も増加し、12年

は1,000名、13年は1,300名を記録した。「集落の豊かな自然や産物等の魅力をもっと多くの方に知ってほしいと思うとともに、地域の方々に誇りを持ってほしいと考えたことが、伊吹の天窓が誕生したきっかけだ。初回開催時には集落が一丸となって準備に当たり、住民も“おもてなし”を楽しんでくれた。その手応えを感じたことで、事業拡大に踏み切ることができた」。元みらいつくり隊員で、伊吹の天窓実行委員長を務める切り絵作家・早川鉄兵さんは話す。実行委員会は元みらいつくり隊メンバーを中心に、30代から40代の地域在住者や出身者10名で構成。デザイナーやイラストレーターなどがそれぞれの持ち味を生かしながら活動にあたっている。

音楽と特産の食と自然 幻想的なライトアップ

伊吹の天窓は今年8月9日、4回目の開催を迎える。スキー場のゲレンデに巨大なスクリーンを設置し、イベントのために作られた絵本を朗読とともに上映。さらにステージでは琴やウクレレのコンサートのほか、伊吹の天窓のテーマソング「イブッキ行進曲」に合わせて踊る「雪ふみ行進」も実施される。このダンスは豪雪地帯の厄介事である雪の処理作業を、イベントを通して楽しく知ってもらうために実行委員会が制作したものだ。動画サイトでも振り付けを配信し、来場者も一体となって踊ることができる。夜にはアウトドア総合メーカーから提供されたいくつものテントに明かりが灯され、早川さんが切り絵で描いた動植物



親子連れにも人気があるオリジナル絵本の上映



切り絵テントのライトアップは多くの人でにぎわう

のシルエットが浮かび上がる。このほか、会場には特産品を使用した料理を販売する店舗や人気カフェ等が集まった「星空食堂」も登場する。

伊吹の天窓をきっかけに 地域がひとつになっていく

イベントの盛り上がりとともに、地域にも変化が表れつつある。「毎年イベントの開催前には各自治会長が集まる場で説明を行い、理解と協力を求めてきた。しかし今年は自治会からの積極的な提案もあり、新たな関係が広まりつつあることを実感した。地域の住民も、会場で使う竹の提供を申し出てくれたり、デイサービス施設の利用者が会場を飾る旗を製作してくれたり、回を追って地域が一体になっていくのを感じられるようになった。地元の高齢者がこのイベントをきっかけに、遠方の家族へ里帰りを呼びかけているという話も聞く」と、早川さんは成果を語った。星空食堂出店に向けて、農産品の加工部と新メニュー開発等の準備が進んでいる。

「住民の協力はもちろん、伊吹の天窓は市の協力も不可欠。協働事業として助成金を出すだけでなく、広報誌やテレビで情報を発信したり、市ならではの情報網を活用したアイデアの提供など、市と委員会が思いをひとつにして取り組んでいる点は、伊吹の天窓の強みだ」と早川さん。昨年10月には、グリーンパーク山東で例年行われてきた「国際花市場」と協力し、新たなイベント「花と食のマルシェ2013」を開催した。伊吹の天窓



星空食堂の屋台。開放的な空間で食事を楽しめる

実行委員会が選定した飲食・雑貨コーナー24ブースを企画し、オリジナルメニューをプロデュース。杉の立木を用いた築山を設置するなどの会場演出も手がけた。今年5月には「伊吹の天窓」を紹介する初のイベントを米原市民交流プラザ(ルッチプラザ)で開催するなど、これまでになかった試みも始まっている。

みらいつくり隊から住民へ 新たな視点で課題に取り組む

「多くの自治体が地域おこし協力隊の定住を望んでいるが、実現はなかなか難しい。そんな中、米原市のみらいつくり隊の隊員は、活動期限後も全員が地域に住み続けている。期間のうち、半分以上を地域に定住する手段を探すための時間として認めたことも効果があったと思う。伊吹の天窓をはじめとするみらいつくり隊の活動をきっかけに、地域でも移住者に対する姿勢が前向きになってきた」と川瀬さん。みらいつくり隊が地域の住民となり、信頼関係を築いたこれからのスタートだという。「住民の一人となったことで、地域の課題が外から見るよりも複雑だということを実感した。今後は伊吹だけでなく、米原全体の魅力を発信する場として、オール米原で伊吹の天窓を盛り上げていければと考えている。目下の課題は、これからの伊吹の天窓を担う人材の育成。地域に関しても次の世代をつくり、継続していくことを大切にしたい」と早川さんは今後の抱負を語る。隊員たちがもたらした新たな息吹は、地域を超えて広まりつつある。